

## 世界文学紀行シリーズを終えて

昨年の4月に始めた世界文学紀行の講演が10月で終わりました。コロナ禍で開催を控えた月も何回かあり結果的に計8回、合計12作品を取り上げました。

作品は順番に「ドン・キホーテ」「風と共に去りぬ」「赤毛のアン」「ロミオとジュリエット」「ハムレット」「罪と罰」「戦争と平和」「車輪の下」「若きヴェルテルの悩み」「ファウスト」「三銃士」「レ・ミゼラブル」。作品の舞台となった国別では7カ国。作家では、セルバンテス、ミッチェル、モンゴメリー、シェイクスピア、ドストエフスキー、トルストイ、ヘッセ、ゲーテ、デュマ、ユゴーと10人になりました。シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」と「ハムレット」は昭島市の街づくり市民会議「国際交流部会」からの要望もあって英語による講演もしました。



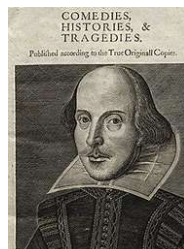
セルバンテス



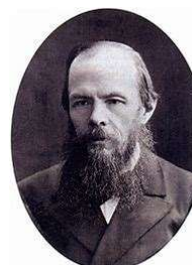
ミッチェル



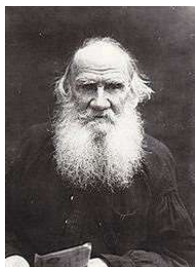
モンゴメリー



シェイクスピア



ドストエフスキー



トルストイ



ゲーテ



ヘッセ



デュマ



ユゴー

今、作家の顔写真を並べてみて皆、中学か高校時代の教科書に載っていた人物です。正直、“よくぞここまでやってきたもの”と自分ながら驚嘆しているところです。

そもそもいかなる動機からおおそれた「世界文学紀行」なんて始めたのか？それはスペインに定年留学した際「ドン・キホーテ」の舞台ラ・マンチャを訪れ書いた紀行が郷里の信濃毎日新聞に5回連載されたこと、英語とスペイン語がなんとかできたこと、現役時代の特派員としての取材経験を活かしたいこと、自分のホームページに目玉となる記事や写真を入れたいこと、などがきっかけとなったことからです。

3年前からコロナ禍で海外に出られなくなった状況下で、昭島市に新しくできた三多摩有数の図書館と付属施設の教室で講座を持てることがわかり、「世界文学を学ぶ会」とのグループを登録しました（その後「世界文学を楽しむ会」と改名）。

また府中に本部を置くTAMA市民塾の講師としても登録されましたが、コロナ禍で講座

開講は私の場合、明年10月に延びたのでそのリハーサル的な意味も込めたところでは。

難しかったのは会場確保と参加人数の調整でした。ふだんは椅子席で50人ほど収容できる教室もソーシャルディスタンスを守るために半減しなくてはならなかったこと。平均すると各回とも20人前後の方が参加くださっています。

少し長くなりますが、ここで各講演のポイントと代表的な写真と名言などをご紹介します。

(各作品の記述は内容的にも長短もアンバランスですが、詳しくご覧になりたい場合には「講演会のスピーチ」欄をご覧ください)、

ドン・キホーテ ミゲル・デ・セルバンテス

### “見果てぬ夢”を追って

スペインはラ・マンチャの田舎郷土キハーンは、騎士道小説を読みふけたあげく、自ら騎士ドン・キホーテと名乗りを上げ、世の不正を糾すべく従者のサンチョ・パンサを伴って諸国遍歴の旅に出ます。そして旅の先々で奇想天外な冒険を経験するのです。

作品は前編・後編とあり、前編の主な目次項目を挙げてみますと「狂える郷土の旅立ち」「ドタバタの叙任式」「風車に挑む」「旅籠の夜の珍騒動」「羊の大群と戦う」「マンブリーノの兜」「葡萄酒の革袋と大血線」など。

後編では「再び冒険を求めて」「サンチョ、主人をたぶらかす」「鏡の騎士と戦う」「ライオンに挑む」「サンチョ・パンサの名統治」「吟月の騎士に敗れる」「ドン・キホーテの死」などが主な話題になっています。

長編小説の書き出しは次のようになっています。

——ラ・マンチャ県のさる村、名は思いたしたくない村に、さほど前のことでもなく、槍かけに槍、古びた楯、ひよろひよろ馬にはしっこい狩犬をそろえた、型のごとき郷土が住んでいた。昼は羊肉よりも牛の勝った煮込み、たいていの晩は昼の残り肉へ玉ねぎなど刻みこんだサラダ、土曜日に塩豚の玉子あえ、金曜日にレンズ豆、日曜だと小鳩の一皿ぐらいそえて、それだけに収入の4分の3が消えた——

ミュージカル「ラ・マンチャの男」でドン・キホーテがつぶやいています。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——

——夢を持つことの大切さ。周囲にどう見られているか、などを気にして自分の信念の道を進まない生き方を鋭く突いています。

ドン・キホーテのことを“年老いた気が狂った爺さん”と見る人もいます。でも私には、滑稽な冒険譚もさることながら、狂気と言われながら、悪を懲らしめ、正義を求め、夢に向かって進む主人公の姿に惹かれるものがあるのです。この私自身の文学紀行もその一端なのです。



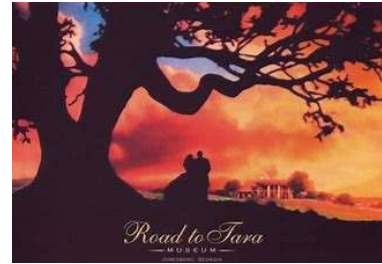
風と共に去りぬ

マーガレット・ミッチェル

### 混乱期には強い生き方が道を開く



アメリカの南北戦争時代のアトランタを舞台にした人間の愛憎が繰り広げられる長編小説です。勝手気ままでありながら強い主人公スカーレットに惹かれます。物語は映画と舞台で世界中で大ヒットしました。



**"After all, tomorrow is another day!"**

**「明日は明日の風が吹く！」**

恋人も財産もすべてを失った後に再び立ち上がろうとする主人公の強さを身につけたい。

赤毛のアン

L・M・モンゴメリー



### 何事も前向きなアンに元気づけられる

孤児として迎えられたグリーン・ゲイブルズの家で年老いた兄妹に育てられていくアン・シャーリーの前向きな言葉にこちらが励まされます。

**「いいお天気朝で、とても嬉しいの。でも雨の朝も、好きよ。どんな朝でも、ワクワクするわ。今日一日、これから何が起きるか、想像の余地があるでしょう」**(第4章 グリーン・ゲイブルズの朝)

**「・・・寝室は、眠るためにあるんだよ」「まあ、マリラ、夢を見るためでもあるわ。美しいものに囲まれた寝室の方が、いい夢がみられるでしょう？」**(第16章 お茶会、悲劇に終わる)

**「明日は、まだ何の失敗もしていない新しい一日だと思うと、ほっとするわ」**(第21章 風変わりな香料)

**「クイーン学院を出た時は、私の未来は、まっすぐな一本道のように目の前にのびていたの。人生の節目節目となるような出来事も、道に沿って一里塚のように見わたせたわ。でも、今、その道は、曲がり角に来たのよ。曲がった向こうに、何があるか分からないけど、きっとすばらしい世界があるって信じるわ」**



**——そして道には、いつも曲がり角があり、そのむこうには新しい世界が広がっているのだ！！**(第38章 道の曲がり角)



## 世界に数ある恋愛悲劇の代表的傑作

Juliet

O Romeo, Romeo, wherefore art thou Romeo?  
Deny thy father and refuse thy name!  
Or, if thou wilt not, be but sworn my love,  
And I' ll no longer be a Capulet.

ジュリエット：おお、ロミオ、ロミオ！なぜあなたはロミオなの？お父上に背き、その名を捨てておくれ、さもなければ、それができないなら、せめて愛の誓いを、そうしてくれさえしたらもうこの身はキャプレットではない。

Romeo

With love' s light wings did I overperched these walls,  
For stony limits cannot hold love out,



ロミオ：恋の軽い翼を借り、その石垣を飛び越えたまでのこと、石の衝立で恋は遮れぬ。

ベランダで芽生えたばかりの恋心をつぶやくジュリエットとロミオの出会いの最も有名なシーンでの会話です。

(左の写真) キャプレット家の館の入り口の壁には世界中からのラブレターが貼られています。

## 四大悲劇の中で最も読まれ舞台化も

To be or not to be, that is the question!

「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か死か）」それが問題だ」

この名台詞で知られ、悩める人たちのシンボルともいえる復讐劇「ハムレット」。

「人はなぜ悩むのか」「愛する人とどう向き合うのか」「迷いを超えてどう決断するのか」等、悩み多き現代人の抱えるテーマにも通じています。

いろんな翻訳家がこの英語をどう訳すか論議があったなかで、たまたまネット上で見つけた関西弁がピッタリに思えたのでここにご紹介しておきます。



物語の舞台クロンボーク

— やったろか〜、あかんか〜、ほな〜、どないしょ〜。 —  
いかがでしょうか？

罪と罰 フョードル・ドストエフスキー



センナヤ広場

### 人間の行為の善悪について重い問いかけ

「一つの小さな罪悪は百の善行によってつくなされる」

「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」

——主人公ラスコーリニコフの“殺人哲学”は不合理と不平等が消えていない現代社会でも共鳴する若者がいるかもしれません。

「・・・ことなく両手で斧を振り上げると、ほとんど努力もせず、ほとんど機械的に、脳天めがけて斧の峰を振り下ろした。まるで力が抜けたみたいな感じだった。だが、いったん斧を打ち下ろすと、たちまちからだのなかに力が湧いてきた」(本文から)



戦争と平和 レフ・トルストイ

### 戦争の実態と歴史への無限の教訓

やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れはてた者やためらっている者の上に、小雨がしとしと降りはじめた。「おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ！やめてくれ・・・いい加減正気に返ったらどうだ！お前たちは一体何をしているのだ？」こう言っているかのようであった。(雨に言わせた著者の強い思いの発露ではないでしょうか)。

写真④はトルストイの生まれ育ったヤースヤナポリャーナの博物館

⑤平和があってこそカップルの幸せもあるのだが・・・



車輪の下 ヘルマン・ヘッセ

### 受験地獄と学歴優先社会に悩んで・・・

ドイツの南部方面の山岳鉄道のような一両だけの列車に乗りカルフ駅に降りたのは自分を含め3人のみ。歩を進めた先は静かな美しい町でした。周囲を山々に



囲まれた谷のあまり広くない空間に、レンガ色からオレンジ色の4・5階建ての木造の家屋が並んでいます。ちょうどスイ



色からオレンジ色の4・5階建ての木造の家屋が並んでいます。ちょうどスイ

スの山中の光景のような感じです。ヘッセの数ある作品の中で『車輪の下』はとりわけ日本人に読まれています。それは受験地獄と学歴優先社会の現代の日本にも通ずる何かがあるからなのかもしれません。「車輪の下」は読書感想文の定番というイメージを持っているようです。

### 若きウェルテルの悩み

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

#### 「実らぬ恋にピストル自殺」に驚きました

「・・・ああ、僕の指が偶然彼女の指に触れたり、ぼくらの足がテーブルの下で互いに出会うことがあると、ぼくの全血管をわななき走り抜けるものがある！ぼくは炎に触れたかのように身を引く。・・・ぼくの唇に触れんばかりになる。そうすると、ぼくは雷に打たれたかのごとく、気を失いそうになる・・・」(ウエルテルの手紙の一端)。

青年ウエルテルが婚約者のいる女性シャルロッテに恋をし、叶わぬ思いに絶望して自殺するまでを描いている。出版当時ヨーロッパ中でベストセラーとなり、主人公ウエルテルを真似て自殺する者が急増するなどの社会現象を巻き起こした。友人ヴィルヘルムに宛てた数十通の書簡によって構成されている(シャルロッテ宛のものも数通含まれる)。高校3年の夏休みに読み、まだ男女間の恋には疎い自分でしたが「実らぬ恋にピストル自殺」に驚いたものでした。

### ファウスト

ゲーテの代表的な作品ですが(私には)難しかった

『ファウスト』は長編の戯曲(詩劇)で、天上界、神の世界、幻想の世界などいろんな場面や人物が出てきて正直とても難しいです。主人公ファウストがいかに悪魔メフィストフェレスに人間としての生き方を破られないでいくかが柱になっています。作品の概要とポイントを紹介しています。



ドイツではライン川クルーズをしました。㊦ライン川の沿岸道路を親父ライダーがパレード ㊧両岸にそびえる中世の城 ㊨『ローレライ』の歌の伝説の乙女像



## 三銃士

アレクサンドル・デュマ



### 中学時代に読んだ血湧き肉躍る冒険小説

フランスの南西部にあるガスコーニュ出身の田舎貴族ダルトニアンは、銃士になることを夢見てパリに出てくる。ところがパリへの道中で謎の騎士に紹介状を盗まれてしまう。挙句、成り行きで銃士隊でも名を馳せる三人衆アトス・ポルトス・アラミスと決闘をする羽目になってしまった。

いわゆる日本のチャンバラ劇ですが王族や枢機卿も出てきて血湧き肉躍る冒険の連続です。私は中学時代に学校の図書室から借り面白くてひと息に読んでしまいました。読む人はきっと「読書好き」になっていくことでしょう。



「One for all, all for one」の正しい意味は？

## レ・ミゼラブル

ヴィクトル・ユゴー

深いヒューマニズムが魂の奥まで揺り動かす  
歴史の舞台上で人間の善性と悪性の昇華を描く



一切れのパンを盗んだがゆえに19年間の投獄生活を送ってきた主人公ジャン・ヴァルジャンが、食事と宿を提供されたミリエル司教から初めて人間らしい扱いを受ける。でも翌朝、ふとした出来心からチャペルにあった銀の燭台を二つ掠め盗ってしまった。彼を捕えた警察に対して司教は言った。「それはあなたにあげたものなのですよ。そこにある別の二つの銀の燭台もあげたものなのになぜ持っていかなかったのですか？」

その場の疑いは晴れたのですが、法と正義感が人生のすべてと信ずるジャヴェール警視の追及は続いていきます。やがてヒロインのコゼットが登場して・・・。



歴史を俯瞰してきた凱旋門



世界三大オペラ座



人力自転車でパリを回る